

# 「スポーツの価値」について

—スポーツ学科に学ぶ女子学生はどのように捉えているか—

About "value of sports"

—How do you think female students studying in the Department sports—

齋藤正俊

Masatoshi Saito

## 要 旨

将来的に保健体育教員を目指していると思われる女子学生の「スポーツの価値」について問うた結果内容である。

彼女達は、様々な視点ではあるが、「スポーツの価値」について、「人との繋がり・コミュニケーション」においては出現数28であり、そのことへ価値を見いだしている者が59人中の最多出現数であった。以下、「健康増進・体力向上」出現数11、「人間の成長・人間形成」出現数8、「感動・感情」出現数8の項目で53.9%の半数を占めていた。「楽しむ（楽しさ）・喜び、応援者も楽しむ」出現数6、「ストレス発散、気分転換」出現数6、「社会性・常識的な知識・マナー」出現数5を合わせれば70.6%である。

そのため、これらの7項目が代表的な「スポーツの価値」として彼女達が捉えていると考えられる。調査人数が少ないため、決定づけることはできないが、資料として考える材料になればと考えている。

一人あたりの出現数は1.73であった。

キーワード：スポーツの価値、繋がり・コミュニケーション、健康増進・体力向上、人間の成長・人間形成、感動・感情、楽しむ（楽しさ）・喜び、ストレス発散・気分転換、社会性・常識的な知識・マナー

## 1. はじめに

現在、スポーツへの興味は一般的に上がってきている。1年伸びたがオリンピックの存在は大きく、アスリートにとっては大きな目標になっている。確かに1年の延長は長く、引退する選手も出ているが、本人達が熟考の末に決めたことであるので周りかとやかく言うことはない。

日本は、思えば幻の1940年に開催されるはずであった東京オリンピックから第二次大戦後の1964年まで、日本のスポーツ界は世界に日本で

も開催することが可能なのだと理解してもらえなかった歴史がある。

当然であろう。戦後すぐであり、ましてや世界を相手に戦争をしたのである。ヨーロッパ諸国やアジアで侵略された国々が反対していたのである。

しかし、日本は経済復興をし、もはや戦後ではないと悲願のスポーツの祭典を開催することができたのである。その喜びはひとしおであったことは容易に想像することができる。

戦後 GHQ によって、教育にも変化がみられ学校教育の場に体育が復活し、体育の中でスポーツを教材としての復活であった。

このことも考えれば不思議な気がする。体育と言うならば、身体活動に限定すればよいと思われるが、体育の教材はスポーツとしての復活したのである。このことに対する考え方は様々であろう。

体育は戦前、戦中は体を鍛えることであった。西欧人に勝つための肉体の創造である。

それが戦後は体育という言葉は残ったが、スポーツが教材となっている。ということは、スポーツに教育的な価値を当時の文部省は、考えていたことになる。

現在、スポーツは日本において存在感は増している。2019年はラグビーの世界選手権があり、サッカーも4年に一度世界大会がある。

日本でもプロのスポーツが存在し、選手の年俵もうなぎ登りである。

アメリカにおいては、野球、バスケットボールやアメリカンフットボールの選手の注目度は高い。そしてスポーツへの注目度も高い。

スポーツは、プロ化の中にあり、そして日本では、教育の中にある。そのようなスポーツはどのような意味を持つのか、である。

日本において、子ども達はスポーツをどのように捉えているのだろうか。そして、スポーツ学部、学科に在籍する女子学生達はスポーツをどのように捉えているのだろうか。教育の中にスポーツが存在するのはなぜなのか。スポーツの価値とはどのようなことに結びつくのか。

本研究は、将来保健体育の教員やスポーツの指導者を目指す学生、それも女子学生に焦点を当て、スポーツの価値について焦点を絞り、どのような意識を持っているのかを知るための資料となるように調査をするものである。

## II. 研究の手順について

### 1. 方法

(1) 対象：神戸市内にある女子大のスポーツ学科の学生で、保健体育科教育法を履修してい

る61名を対象とする。

(2) 調査：「スポーツの価値」についてどのように考えているのか、という問いに対して自由記述で回答を求める。

(3) 調査期間：2020年9月

(4) 分析：出現した言葉を集約していく KJ 法を用いる。

(5) 統計処理：3 × 1 の  $\chi^2$  から、CR 値を求める。

## III. 結果

KJ 法を用い命名し項目毎にまとめたものが表 1 である。意味が同じと考えられるものは、まとめて項目の中に内包したものもある。回答者は61名中59名であった。一人あたりの出現数は1.73である。

表 1 は出現数の数値順に並べてある。項目に関しては24の項目に分類することができた。

統計の結果は、次の通り 28 : 11 : 8 ( $\chi^2 = 14.85 > 10.597$ ,  $P = .05$   $df = 2$ )

CR (28 : 11) = 2.56 > 1.96\*, 11 : 8-

8 : 6 : 5-、4 : 3 : 2-、3 : 2 : 1- であった。

### 1. 項目

(1) 人との繋がり・コミュニケーション (28出現・27.5%)：スポーツには人との繋がり、世界とつながることによってコミュニケーションも広がると考える項目である。

(2) 健康増進・体力向上 (11出現・10.8%)：スポーツは健康を増進し、体力の向上も見込めると考える項目である。

(3) 人間の成長・人間形成 (8出現・7.8%)：スポーツは人間を成長させ、そのことが人間形成にも役に立つと考える項目である。

(4) 感動・感情 (8出現・7.8%)：主に感動である。スポーツは見ているものを巻き込んで感動をする、与えると考える項目である。

(5) 楽しむ(楽しさ)・喜び、応援者も楽しむ(6出現・5.9%)：スポーツは非日常的なものなので、楽しみであり、応援する者も楽しいと考える

表1 スポーツの価値についての回答内容

no	項 目	N	%
1	人との繋がり・コミュニケーション	28	27.5
2	健康増進・体力向上	11	10.8
3	人間の成長・人間形成	8	7.8
4	感動・感情	8	7.8
5	楽しむ（楽しさ）・喜び、応援者も楽しむ	6	5.9
6	ストレス発散・気分転換	6	5.9
7	社会性・常識的な知識・マナー	5	4.9
8	生活の一部・必要不可欠なもの（人生）	4	3.9
9	挑戦する力	3	2.9
10	元気・人を幸せにする	3	2.9
11	精神性・努力（困難を乗り越える）	3	2.9
12	能力向上	2	2.0
13	生きる力	2	2.0
14	生涯スポーツ	2	2.0
15	思考力、判断力、表現力	2	2.0
16	人生を豊かにする	1	1.0
17	人の優しさ	1	1.0
18	喜怒哀楽	1	1.0
19	生活の質の向上	1	1.0
20	充実感、達成感	1	1.0
21	自分の弱さを知る	1	1.0
22	様々な出来事に遭遇	1	1.0
23	支え合い	1	1.0
24	経済効果（オリンピックなど）	1	1.0
		102	100.0

一人あたりの出現数 1.73  
回答者 59名

項目である。

(6) ストレス発散、気分転換(6出現・5.9%)：スポーツはストレスの発散、気分転換には適していると考えられる項目である。

(7) 社会性・常識的な知識・マナー(5出現・4.9%)：スポーツは社会性に必要な常識やマナーを身に付けるのに適していると考えられる項目である。

(8) 生活の一部(4出現・3.9%)：日頃から生活の一部になっており必要不可欠なものと考えられる項目である。

(9) 挑戦する力(3出現・2.9%)：挑戦する力

を育てると考える項目である。

(10) 元気、人を幸せにする(3出現・2.9%)：スポーツは人を元気にさせ、幸せにする、と考える項目である。

(11) 精神性・努力(3出現・2.9%)：スポーツは困難を乗り越える力を育てることができる。

(12)～(15)(2出現・2.0%)：能力の向上、生きる力、生涯スポーツ、思考力・判断力・表現力の項目である。技能の向上が見込め、いきる力を与えてくれ、生涯そのスポーツに取り組むことができ、思考・判断・表現力を身に付けさせてくれると考えている。

(16) ～ (24) (1出現・1.0%)：人生を豊かにする、人の優しさ、喜怒哀楽、生活の質の向上、充実感・達成感、自分の弱さを知る、様々な出来事に遭遇、支え合い、経済効果の項目である。

#### IV. 考 察

順番に考察に取り組んでいくが、数値として大きい出現数順に述べていくことにする。

(1) 人との繋がり・コミュニケーションについて：28の出現数であり、59名中の半数近くの者が回答していることになる。回答している内容は、人との繋がりを感じていることである。この大学のスポーツ学科女子学生は、部活動経験者がほとんどである。

彼女らは、部活動を通して仲間、教員、対戦者・チームの人間との交流があり、特に仲間とのつながりを心地よく感じているようである。

チームスポーツを経験している者であろうが、勝敗を経験した際に、仲間とともにその結果を味わうことに絆的なことを感じており、チームメイトとの繋がりを重要視していた。

また、海外との交流試合の時に負傷者の対応について、敵味方関係なしに助け合っている姿などを見ていることを書いている学生もおり、仲間との繋がり、様々な場面での繋がりをスポーツの良さと考えているとも解釈できる。

(2) 健康増進・体力向上：11の出現数であった。スポーツをすることは、体力を向上させたり、免疫力を上げることができる。強い体づくりが実現するため、健康増進や体力向上の価値があると考えている項目である。

スポーツは各種の運動で成り立っている。スポーツを行うということは、必ず体のどこかを動かすことになる。

そして、そのために人間は栄養源を摂取するが、それは、体を動かすことで消費する。栄養摂取量が栄養消費量を上回る状態が続けば、脂肪が必要以上に蓄積し、肥満になる。糖尿病や高血圧、脂質異常症などの生活習慣病になるリスクが高くなる。

しかし、そこでスポーツ・運動を行うことで、栄養摂取量と栄養消費量のバランスが保たれることになる。

そのことが、生活習慣病などの予防になるため、健康の保持増進につながることであり、併せて体力の向上も見込める価値があると考えているようである。

(3) 人間の成長・人間形成：8の出現数であった。代表的な回答として部活動を通して協調性や諦めずに何事に対しても挑戦する強い意志を獲得することができた、と記述している。

自分本位から仲間との協調性に発展させる力を得たり、自分自身を精神的な成長につなげたりすることができていることを述べているのであろう。それも、仲間との関係が重要な要素であり、お互いに刺激を与え合って成長し合っているようである。

(4) 感動・感情：8の出現数であった。主に感動であるが、感動と感情を同じ項目で捉えているのは、感情から感動に結びついていくと考えていることがうかがえた。

劣等感情を考えると、そのことをバネにしてスキルアップのための向上心につながると考えているように思われる。

また、ゲームでの目を見張るようなプレーが感動につながる可能性を思い浮かべたからであろう。

感動は喜びにつながり、達成感につながる。自分のプレーが上手くいったときの喜びであり、達成感である。

自分自身だけでなく、勝利や素晴らしいと思えるプレーは観客という周囲にも感動を与えることができると考えている。感動の共有である。

感情に関しては、喜怒哀楽の感情を勝負において、仲間との交流を通じて味わうことができると感じている。

感情は非常に大切なものである。悔しさは、上記のごとくスキルアップにつながっていくであろうし、感動は快感情につながっていく。

スポーツがアスリートの精神に好影響を及ぼす

現象であろう。

(5) 楽しむ(楽しさ)・喜び、応援者も楽しむ：6の出現数であった。こども楽しさ・喜びを同列にしているが、それは、H29年に出されている学習指導要領によることが大きいように思われる。

大抵の種目に「楽しさや喜びを味わうことのできる運動である」と述べられているからである。

学習指導要領は、学校教育での目標や身に付ける資質能力について述べているものである。従って、授業場面におけるスポーツ経験は部活動を軸にしたスポーツ経験者との心理的ギャップが生じることがあるが、それは仕方のないことである。

しかし、一般的には、スポーツを行い、汗をかくことで楽しい気分になる。難易度を下げる工夫を凝らせば、高齢者や子どもも、種目にもよるが、運動として楽しむことができる。また、大きなゲームであれば観客として応援する楽しみを感じることができる。

スポーツ社会学の観点から考えれば、Jリーグ・サッカーやプロ野球のサポーターの獲得につながる要素を感じることができる。

(6) ストレス発散、気分転換：6の出現数であった。現代社会においてはかなりのストレスを感じる世界になっているが、体を動かすことによって、気晴らしや、気分転換になりそれらのことから解放する手段と考えていること、運動好きな者にとっては快感や精神的な充実を味わうことができると考えている。

(7) 社会性・常識的な知識・マナー：5の出現数であった。スポーツの場面では、指導者がいて、仲間がいる。仲間には先輩がいて、後輩もいる。

このような中で日本のスポーツは発展してきている。そこでは礼儀作法を自然に学ぶことができ、そこで学んだことが社会に出たときにも礼儀作法に困らず円滑なコミュニケーションを取ることができると考えている。

(8) 生活の一部：4の出現数であった。スポーツは、学校の授業に、部活動としても存在し、地域のスポーツクラブにあっては、必ず行われている。

学生達は、ほとんどが部活動経験者である。したがってスポーツは生活の一部となっているのであろう。

併せて競技スポーツになると勝負があり、そのときに達成感や充実感という努力の結果や負けた際には悔しい感情を学ぶ。そのため、スポーツを通して心身の発達にも必要不可欠なものではないか、と考えるのであろう。

(9) 挑戦する力：3の出現数であった。スポーツは楽しいものであるが、その一つに挑戦することがあげられる。

目標を決めることによってその種目に対して楽しさを感じることができる。そして副次的に何事に対しても興味を持って取り組むことができると考えていると思われる。

(10) 元気・人を幸せにする：3の出現数であった。スポーツはスポーツをしている者だけでなく、ラグビーの世界カップの 때가例にあげられるように、見ている者に感動を与えることができ、そのことが人を幸せにしている、と結びついたのでないだろうか。

(11) 精神性・努力(困難を乗り越える)：3の出現である。辛いときにそこで辞めてしまうのではなく耐えることなどの大切さ、結果が全てではなく、自分がどれだけ頑張ったかが大事である、など目標を達成するために困難を乗り越えることを経験してきたからこそ出てきた思いであろう。

(12)～(15) 能力の向上、生きる力、生涯スポーツ、思考力・判断力・表現力：これらは2の出現数である。

体力をつけることや、筋力を向上させることができる。筋力や体力を鍛え、けがや病気を防ぐことができる。楽しむことだけでなく、自分自身の能力を高める。

スポーツをしているときの楽しさや喜びが生涯スポーツにつながる。生涯を通して携わることができる。スポーツは知識や技能だけでなく、スポーツを通じて思考力や判断力、表現力などの人間にとってとても重要である技能を身に付けられること、これらに価値を見いだしている。

(16)～(24) 出現数は全ての項目において1である。順不同であるが、人生を豊かにする、人の優しさ、喜怒哀楽、生活の質の向上、充実感、達成感、自分の弱さを知る、様々な出来事に遭遇、支え合い、経済効果の項目であるが、精神的な部分に関係していることが多い。

団体競技を想定してのことであったが、一人ではできないし、勝負に勝てないと思って、支え合いを考えている。

プレーの失敗が自分の弱さを知ることになり、そこから意欲につながっていくことがあったりしていることがうかがえる。

これらのことは、部活動を経験した者の回答である。これを授業という視点で捉えるとどうなるであろうか。

彼女達の考える「スポーツの価値」は学校教育の中の教科「体育」と「部活動」が基本発想である。ということは体育授業においては生徒にこのように考えさせる場面を設定しなければならない使命を持っているのかも知れない。

全体を見て、主に出現数による(1)～(3)について再考し加筆すると、出現最多数の「繋がり・コミュニケーション」については、中・高の学校体育の中では、スポーツを教材として扱っているが、文科省としては、このように学生が考えることを、「スポーツの価値」として認めていることになるのではないだろうか。従って学校体育の授業でスポーツを行う価値を見いだすことができるのである。

そのことも含めて、部活動経験者の答えではあり、スポーツを通した視点でしか考えていない部分ではあるが、社会を冷静に見て感じているのであろう。社会における人間関係の重要性を見ていると思えることである。彼女達はスポーツの場面から社会を見ているのではないだろうか。

しかし、必ずしも深く考えているわけでもない部分も見えてくる。軽く挨拶を交わすようなこともスポーツの要素としてあると思っていることである。当然といえば当然である。

対戦した相手と深く交流することは、条件がそ

ろわないとあり得ないからである。

次に上がっている「健康増進、体力向上」にも当然視点がある。これはスポーツというより、運動の効用として捉えているように思うが、彼女達にとっては運動イコールスポーツのようである。

やはり学校教育、そして社会の健康観、それではニュースにもなる生活習慣病あたりを思い浮かべるのであろう。

最後に8の出現数で、二つの項目があがってきたのであるが、一つは「人間の成長・人間形成」についてであった。

今の若者には死語となっていると思われたのであるが、諦めずに挑戦する精神などが現れており、やはりこのような気持ちは過去からつながっていくものであると感じることができる。人間の成長や人間形成上必要な心理的な要素であろう。

同数の「感動・感情」については、自分のことにとどまらず、ゲームを観戦するという観客が存在したとき、これらの人達も巻き込んで感動することができる。この共有感があるのであろう。

## V. 結 論

スポーツ学科に在籍する一部の学生を対象とした「スポーツの価値」についての調査においてKJ法における結果は24項目にすることができた。

5以上の出現数から見た傾向は以下の通りであった。

1. ①「人との繋がり・コミュニケーション」②「健康増進・体力向上」③「人間の成長・人間形成」④「感動・感情」の4項目で53.9%であった。
2. 出現数6を見ると、⑤楽しむ(楽しさ)・喜び、応援者も楽しむ⑥ストレス発散・気分転換であり、併せて出現数5を見ると⑦社会性・常識的なマナーであり、24項目中3項目(16.7%)であるが上記の4項目と合わせると70.6%になっていた。
3. 5以下の出現数は4、3、2、1の数であった。
4. 7項目で出現数の7割を超えることから、これらの項目をもって、スポーツ学科に在籍し保健

体育教員を目指していると思われる女子学生が考える「スポーツの価値」といえることが示唆された。

## VI. 参考文献

- 井上俊、亀山佳明：スポーツ文化を学ぶ人のために 世界思想社 1999
- ヨハン・ホイジンガ：ホモルーデンス 中公文庫 1973
- 中澤篤史：季刊家計経済研究 SUMMER NO103 pp42-49 2014
- ロジェ・カイヨワ：遊びと人間 講談社学術文庫 1990
- 杉本厚夫：体育教育を学ぶ人のために 世界思想社 2001
- 杉山重利、高橋健夫、園山和夫 [編] 保健体育科教育法 大修館書店 2009
- 高橋健夫、岡出美則、友添秀則、岩田靖編著：体育科教育学入門 大修館書店 2002
- 多木浩二：スポーツを考える ちくま新書 1995
- 玉木正之：スポーツとは何か 講談社現代新書 1999
- 友添秀則：体育の人間形成論 大修館書店 2009